

# 令和2年度 男女共同参画社会づくり作文コンクール



男女が互いにその人権を尊重し、責任をともに分かち合い、性別に関わりなく個性と能力を十分に発揮できる「男女共同参画社会」の実現に向けた意識を高めるため、市内の中学生を対象に、男女共同参画に関する作文を募集しましたところ、数多くの作品が寄せられました。

ここに、入賞作品をご紹介します。

作品応募総数 133点

(敬称略・五十音順)

## 【最優秀賞】

性別の縛り

岩 瀬 中学校 3 年

江尻 柚菜

## 【優秀賞】

女性が活躍する社会

上 滝 中学校 3 年

杉木 歩花

男女共同参画の実現に向けて

山 室 中学校 3 年

竹下 新之典

男女平等社会を生きる

岩 瀬 中学校 2 年

中野 美結

みんなで支え合う社会

堀 川 中学校 2 年

氷見 和奏

## 【佳作】

男女差別のない未来へ

南 部 中学校 2 年

岡崎 結真

希望あふれる世の中に

上 滝 中学校 2 年

表 千尋

男女平等と自分らしさについて

南 部 中学校 3 年

川端 依愛

苦しむ人に私達ができること

上 滝 中学校 2 年

久郷 萌生

本当の価値とは

上 滝 中学校 3 年

恒田 蒼太朗

指揮者

岩 瀬 中学校 3 年

野尻 麻妃瑠

自分らしく生きる

岩 瀬 中学校 2 年

松原 結菜

男女共同参画社会づくりについて

芝 園 中学校 2 年

村上 絆樹

男女平等について

上 滝 中学校 2 年

山崎 芯

男性の美意識について

上 滝 中学校 2 年

吉田 莉央

最優秀賞

## 性別の縛り

岩瀬中学校3年 江尻 柚菜

みなさんは、自分の性別に満足しているだろうか。多様化する社会、性別の枠に囚われず活躍できる現代においても、未だ生きづらさを抱える人は少なくない。

友達と話しているとき、たまにこんなことを聞かれる。

「柚菜は女でよかった？」

心の中で繰り返し自問する。だが、正直、分からない。私は女だが、「男性」という性別に憧れがある。

自分の性認識が男でも女でもない人のことを、「X（エックス）ジェンダー」と言うらしい。近年、その数は増加傾向にある。しかし、新聞に載っていた「身のまわりに性別で悩んでいる人はいると思うか」というアンケートでは、「いないと思う」が半数以上を占め、「いると思う」は二割程度に収まっていた。インターネットの掲示板を覗いても、性的少数派に対して否定的な意見が予想以上にあった。鋭利な言葉で批判する人もいた。私は心が苦しくなった。

自由に生きる権利は誰にでもあるはずなのに、性的少数派は少し排他的な見られかたをされていると思う。自分を認めてもらえないことほど辛いことはない。性の多様化する世の中、自己表現のしかたは何百通り、いや、何千通りあってもいいと思う。もし自分の性別に疑問をもっているなら、うやむやにせずに向きあうことが大事だと思う。自分を見つめ直すことで、性についての新しい視点を見つけることができるかもしれない。自分らしい生き方に辿りつけるかもしれない。

そして、いつかは「私は〇〇です！」と、気後れせず言える、偏見のない自由な社会になっていてほしい。

優 秀 賞 (4 点)

## 女性が活躍する社会

上滝中学校 3 年 杉木 歩花

皆さんは、男性ばかりの世界で活躍している女性をご存知ですか。私は、家でテレビを見ていたときに青森県でねぶたを作っている女性を見ました。ねぶた作りは、とても大きな作品を作るため、体力や筋力が必要です。そのため、ほとんどが男性で女性がねぶた作りをすることはあまりないそうです。

私が見た女性も父親から反対をされていて、作り方をなかなか教えてもらえませんでした。しかし、毎日ねぶた作りを見て、ノートに作り方を書きつづけ、独学で一つねぶたを作りあげました。そのねぶたは、普通のねぶたより小さいものでしたが、町にかざられると、町の人から高い評価を受け、ねぶた職人として本格的にねぶた作りを学びはじめ、その後、ねぶた祭りで実際に使うねぶたを作りあげました。ねぶた祭りで使われたねぶたは、女性だからこそ作ることができたと思える作品で、小さな子供と母親をイメージしたものでした。

この話を聞いて女性だから、男性だから、といって夢をあきらめる必要はないということを知りました。また、女性にだからできること、男性にだからできることは必ずあると思うので、自分にだからこそできることを見つけ、行動に移すことが大切だと感じました。「男性」「女性」という区別をするのではなく、すべての人が協力して、お互いの良い所を出し合い、より良いものを造りあげていくことが、これからの社会をより良くしていくために求められてくることだと思います。

## 男女共同参画の実現に向けて

山室中学校 3 年 竹下 新之典

今、日本は世界の中でも女性の活躍の場が少ないというのが問題になっています。その中で、国立研究開発法人 宇宙航空研究開発機構（JAXA）では、女性が大いに活躍しています。女性管理職比率は全体の 11.2%、また、出産・育児からの女性職員復帰率は 100%を誇ります。（2011 年度以降）

なぜ、JAXAでは、このように女性が活躍できているのでしょうか。それは、JAXAの取り組みにありました。JAXAでは、女性が仕事と出産、育児が両立できるよう、支援制度が導入されています。その制度を利用し、女性の「仕事がしたい」という気持ちと「出産・育児がしたい」という気持ちを両立させています。男女共同参画という、日本における最大の課題を、制度というもので乗り越えること、それが今後、社会や企業では必要になることだと思いました。

一方で、JAXAの女性職員の体験談を読みましたが、これだけ環境の整った会社でもたいへん苦勞されているんだと驚きました。幼い子供を養育しながら働くと、仕事量を制限せざるを得ず、やりきれない感が残っていたり、毎日定時に退社しなければならないプレッシャーはものすごかったそうです。また、家庭の支援が得られない家庭は仕事と子育ての両立は相当困難だとおっしゃっていました。

たくさんの制度があり、それにより負担は軽くなるのかなと思っていましたが、「家庭の支援」がなければいけないという本音を知り、とても難しい問題だと感じました。どうすればいいか、自分はよく分かりませんが、今後、日本の未来のため、女性の活躍のため、打開策を見つけていく必要があると考えます。他人事ではなく、自分事として、生涯に渡り、考えていこうと思いました。

## 男女平等社会を生きる

岩瀬中学校 2 年 中野 美結

「僕は女です」

あなたはこの言葉を聞いて違和感を感じましたか？

大半の人が、おかしいと思ったことでしょう。なぜなら私たちは一人称だと女は「私」、男は「僕」や「俺」を普段使っているため、当たり前だと思い込んでいるからです。しかし本来、そんな決まりはありません。「みんながそう言っているから」、「言わなきゃ変に思われるから」という世間体に縛られた考え方に私たちは支配されています。

また、家庭生活においても男は社会に出て「仕事」、女は家庭を守り「家事」をするといった旧来的な考え方があります。しかし、私は社会に出て働きたいです。必ずしも家事の負担を女の仕事と決める必要はないと思います。社会に出ての仕事、家庭内での仕事、性別などにより、分ける必要はありません。家事を誰がするかは、その家庭事情によるものです。仕事や家事は、誰がしてもおかしくないという考え方が当たり前になっていけば良いと思います。男女の垣根のないフラットな考えが世の中に広がり、もっと住み良い社会になることを願います。

また、男女平等について考えた時、男女の違いについても考えました。体格の違いや筋力の違い、それぞれの個性や能力の違いなどに気づきました。そして何よりも違うのは、「出産」です。出産は女でなければできません。そんな中、男の育児休暇制度がある事を知りました。子どもを育てることは性別によって分けられるものではありません。ただ、驚くべきことは育児休暇制度の男性の取得率の低さです。まだ「育児は女の仕事」という考えが社会に根強くあるからでしょうか。

私は、男女平等社会を目指す日本なら、男だから、女だからといった固定的な考えを捨て、お互いの意見や生き方を尊重し合い、より良い社会になってほしいと思います。

## みんなで支え合う社会

堀川中学校 2 年 氷見 和奏

私の両親は、毎日仕事に行きながら家庭のことでもしてくれています。私が今、普通に食事をし、生活できているのは、両親が仕事をしながら家庭のことでもしてくれているからです。それはあたりまえではないと思います。

私の父は私よりも早く仕事に行き、私が寝る頃に帰ってきます。小さな頃からその姿を見ていたので、とても大変そうだと思っています。時間があれば休日であっても仕事に行くことがあります。母は私たちが帰るギリギリに帰ってきて、放課後、私や妹を習い事に送迎してくれます。しかし、両親は私たち家族との時間はとても大切にしてくれます。家族で過ごす時間は私にとって幸せな時間です。

妹が生まれた時、私は三歳でした。そんな私の世話をするために、父が休暇をとってくれました。そのおかげで、私はさみしい思いをせず、安心して生活することができました。忙しい仕事の中、私のため、家族のために休暇をとってくれたことに感謝しています。

休暇をとるのはそう簡単なことではないと思います。もちろん、休暇をとると仕事をする時間が減ります。また、周りの人たちにも迷惑をかけてしまうかもしれません。でも、父は休暇をとってくれました。それは周りの人の理解、協力があつたからこそだと思います。父はもちろん、周りの人たちの理解、協力があつたおかげで私は安心して生活できたと思うと、より感謝の気持ちが深まりました。改めて、たくさんの人に感謝したいと思ったので、感謝の気持ちを伝えていきたいです。

このように、両親がどちらも大変だと、男性が家事育児をすることもあると思います。男性が家事育児をすることは、良いことだと思うので、どんどん受け入れていくべきです。これからの社会が、男性の家事育児を受け入れ、周りの人も協力してあげられる、すてきな社会になってほしいと願っています。